

**LOUVRE-DNP**  
MUSEUM LAB

ルーヴル－DNPミュージアムラボ 第7回展

---

**外交とセーヴル磁器展**

ヨーロッパの歴史を動かした華麗な器たち。

ルーヴル－DNPミュージアムラボ 第7回展

## 外交とセーヴル磁器展 ヨーロッパの歴史を動かした華麗な器たち。

主催：ルーヴル美術館、大日本印刷

協力：日本航空

会場：ルーヴル－DNPミュージアムラボ

東京都品川区西五反田3-5-20 DNP五反田ビル1F

会期：2010年10月23日（土）～2011年5月15日（日）

<http://museumlab.jp>

アジアでは早くから製造されていた白い肌の磁器は、

ヨーロッパにも輸入され、人気を博していました。

この美しい磁器を自分たちの手で作りたいと考えた

ヨーロッパの人々が、様々な試行錯誤を経て、

その謎に包まれた製法にたどりついたのは

18世紀のことでした。

中でも豪奢な絵付けがされたフランスのセーヴル磁器は

ヨーロッパ中の憧れの的であり、

フランス王室から贈られる「外交上の贈り物」

として使われました。

第7回展では18世紀のフランス王朝から

他国へ贈られたセーヴル磁器を、

その技法や当時の宮廷の食卓儀礼を織り交ぜ紹介します。

## 展示作品



© 2010 Musée du Louvre /  
Martine Beck-Coppola

「小さなシュロの葉」文様の皿、  
1758年3月にルイ15世からデンマーク王  
フレデリク5世に贈られた食器セットの一部  
  
王立ヴァンセンヌ磁器製作所  
1756年  
ルーヴル美術館、工芸品部門  
軟質磁器  
1918年アルベル及ボール・バニ工両氏による寄贈  
OA 7197  
高さ4cm、口径24.7cm



© 2010 Musée du Louvre /  
Martine Beck-Coppola

「緑のリボン」が施された「花輪飾り」の皿、  
1758年12月2日にルイ15世から  
オーストリア皇后マリア＝テレジアへ贈られた  
食器セットの一部  
  
王立セーヴル磁器製作所  
1757年  
ルーヴル美術館、工芸品部門  
軟質磁器  
1918年アルベル及ボール・バニ工両氏による寄贈  
OA 7192  
高さ3.5cm、口径24cm



© 2010 Musée du Louvre /  
Martine Beck-Coppola

「モザイク」コンポート皿、  
1760年4月にルイ15世から  
ブファルツ選帝侯カール＝テオドールに  
贈られた食器セットの一部  
  
王立セーヴル磁器製作所  
1759年  
ルーヴル美術館、工芸品部門  
軟質磁器  
1881年アドルフ・ティエール夫人による遺贈  
TH 1180  
高さ5cm、口径22cm



© 2010 Musée du Louvre /  
Martine Beck-Coppola

「常用」ハーフボトル・クーラー、  
1773年にルイ15世から  
ナポリ王妃マリア＝カロリーナに  
贈られた食器セットの一部  
(カルロッタ＝ルイーザ)  
  
王立セーヴル磁器製作所  
1773年  
ルーヴル美術館、工芸品部門  
軟質磁器  
1983年マルセル・ブリュネ娘から寄贈  
OA 10879  
高さ17cm、口径18cm、幅23cm



© 2010 Musée du Louvre /  
Martine Beck-Coppola

楕円波縁皿、1773年に  
ルイ15世からアストゥリアス公妃  
マリア＝ルイサ・デ・バルマへ  
贈られた食器セットの追加品として  
1776年3月1日に送られた品  
  
王立セーヴル磁器製作所  
1775年  
ルーヴル美術館、工芸品部門  
硬質磁器  
1984年に取得  
OA 11022  
高さ4cm、口径38cm×27cm



© 2010 Musée du Louvre /  
Martine Beck-Coppola

「豪華な色彩の縁飾り」  
文様の蓋付鉢(ボ・ア・オワル)、  
1784年8月26日に納められた王妃  
マリー＝アントワネットの食器セットの一部  
  
王立セーヴル磁器製作所  
1784年  
ルーヴル美術館、工芸品部門  
軟質磁器  
2001年に取得  
OA 11979  
高さ25cm、幅 28.5cm、口径(蓋) 23cm



© 2010 Musée du Louvre /  
Martine Beck-Coppola

「豪華な色彩の縁飾り」文様の受け皿、  
1784年6月22日に  
ルイ16世からスウェーデン王グスタフ3世に  
贈られた食器セットの一部  
  
王立セーヴル磁器製作所  
1784年  
ルーヴル美術館、工芸品部門  
軟質磁器  
2001年に取得  
OA 11980  
高さ5.5cm、口径46.2cm×37.5cm



「イルカの庭」の壺、  
1784年10月22日にルイ16世  
からプロイセン公ハインリヒへの贈答品

王立セーヴル磁器製作所  
1781年  
ルーヴル美術館、工芸品部門  
硬質磁器  
1997年、フィリップ・ローラン、  
オリヴィエ・クレメール両氏による寄贈  
OA 11854  
高さ48cm

© 2010 Musée du Louvre /  
Martine Beck-Coppola



ポタージュ皿、  
1786年6月12日にルイ16世  
からロンバルディア総督、  
オーストリア大公フェルディナントに贈られた  
食器セットの一部

王立セーヴル磁器製作所  
1785年  
ルーヴル美術館、工芸品部門  
軟質磁器  
旧王立リモージュ製作所から1999年に寄贈  
OA 11916  
高さ4cm、口径24cm

© 2010 Musée du Louvre /  
Martine Beck-Coppola



ルイ=シモン・ボワズ作の  
彫刻をモデルとする  
マリー=アントワネットの胸像  
アレクサンドル・クラーキン公爵の注文品

王立セーヴル磁器製作所  
1782年  
ルーヴル美術館、工芸品部門  
硬質磁器  
ロバート・アブディー卿を記念して1982年に寄贈  
OA 10898  
高さ40cm

© 2005 Musée du Louvre /  
Peter Harholdt

## 観覧概要

### 18世紀フランスの威光



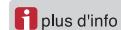
16世紀末に、ブルボン家が王座につくと、  
フランスの影響は国境を越えて広がります。

18世紀には非常に強い政治的勢力を誇るようになります。  
フランス語は、ヨーロッパの宮廷で公用語として用いられるようになります。  
1756年、条約によりオーストリアとの和解が締結し、  
数世紀続いた争いに終止符が打たれます。  
後のルイ16世とオーストリア皇女のマリー=アントワネットの結婚で、  
両家の関係は確固たるものとなり、強国としての役目を果たしていきます。  
その影響力はフランス文化や生活様式が  
ヨーロッパに広がることで更に強くなります。  
特に、豪華な贈り物は外交手段として用いられ、重要な役割を果たしました。

### 外交上の贈り物



17世紀末から、歴代のフランス王は、外交上の贈り物として、  
金銀細工や権威ある製作所で作られたタapisserieなどを贈りました。  
1758年以降、ルイ15世は、セーヴルの新しい磁器製作所の豪華な品々  
を贈ることで、新機軸を打ち出しました。



ミュージアムラボのwebサイトで追加情報がご覧になれます。

ブルボン家とハブスブルク家の関連家系図

<http://www.museumlab.fr/pv/gifts>

## 磁器を見る

作品に直接あてられた光を追いながら、磁器の材質、形状、装飾を鑑賞します。例えば磁器には、軟質磁器と硬質磁器の2種類があります。軟質磁器の表面は滑らかで、彩色された装飾には起伏があります。それに対して硬質磁器の表面はやや金属的で、彩色された装飾は薄く、起伏はありません。

## マリー=アントワネットと芸術

マリー=アントワネットは幼い頃から、様々な芸術分野で洗練されたセンスを發揮し、当時、最も優れた芸術家たちを起用しました。セーヴル磁器をこよなく愛好していたことは、王立セーヴル磁器製作所から定期的に磁器を購入していました。後期の注文の一つ、「豪華な色彩の縁飾り」の食器セットは、チュイルリー宮殿の王妃の居殿のために作られ、展示作品の蓋付鉢(ボ・ア・オワール)はその一部でした。

## 豊かで多様な器形と装飾



18世紀セーヴル磁器の形状や装飾には、製作当時の美意識を観察することができます。展示作品の一つ、蓋付鉢(ボ・ア・オワール)は、華麗で豊かな金の彩色から、「豪華な色彩の縁飾り」と呼ばれる食器セットの一部で、やや四葉形をなす円形で、ロカイユ様式の渦巻状の脚4本の上に取り付けられています。また、アンティチョークとボロネギの形をした持ち手のある蓋と胴体に施された、カルトゥーシュ(飾り枠)とそれを繋ぐ帶状装飾(フリーズ)には、花や真珠、月桂樹などのモチーフが規則的に配列され、典型的な新古典主義様式を示しています。作品の裏には、王立製作所を示すルイ15世のイニシャルLを二重に交差させたマークのほか、金彩绘付師、绘付師、製造年度が1784年だったことを示すマークも見られます。

## 装飾を施す



展示作品の装飾モチーフを自由に組み合わせて自分だけのお皿をデザインしながら、装飾的効果を確認していきます。

## 軟質磁器の製作技術

軟質磁器とは、中国の磁器の白さや透明感を模倣するために開発された素地のことです。一方、中国や日本の磁器は主にカオリンを含む素地を用いていたので、ヨーロッパでは硬質磁器と呼ばれていました。1769年に、リムザン地域(リモージュ付近)でカオリンの鉱脈が発見されると、その翌年からセーヴル磁器製作所の工房でも硬質磁器の作品が作られるようになりました。



## 軟質磁器の製作工程

- 素地の準備：細かくすりつぶしたバート・ド・ヴェール(ガラス粉の生地)、石灰質泥灰岩、その他白い鉱物を混ぜます。こうして出来上がった混合物を、樽の中で8～10ヶ月間寝かせます。
- 作品の成形：まず壺をろくろで成形します。把手、高台、浮彫装飾は、型に入れたり、手で形を作ったり、別個に成形します。全てを組み立てて、1200度で1回目の焼成を行います。
- 研磨と釉掛け：研磨をしてから、作品を釉薬に漬け、光沢が出るように二度目の焼成を行います。
- 装飾を施す：金または、金属の酸化物を石灰化して得られる色を付け加えるたびに、各色の耐熱性に応じて焼成温度を変える必要があります。

最も豪華な作品には、時には10人ほどの職人の介入を必要としました。各製造過程には専門の職人が付いていました。

この「デュプレシ」の花瓶の製作工程をたどる鑑賞システムは、パリ・ルーヴル美術館に再設置される予定です。

## フランス式の食卓儀礼



フランス式食卓儀礼とは、テーブルに一連の皿が決まった順序で次々に給仕される食事方法のことです。複数のコースで構成され、コースの数は3から8にも及び、そのため多種多様な食器を必要としました。会食者は席の近くにある容器から、自分の取り皿に自ら料理を取り分けます。テーブルに所狭しと並べられた料理は、それぞれのコースが終わるとすべて片付けられます。この食事方法は16世紀に確立され、最終的にルイ14世（1643–1715年）の治世下で体系化されます。19世紀初頭、ナポレオン1世の後押しにより、「ロシア式食卓儀礼」がフランス式食卓儀礼に取って代わり、フランスでは現在もこの給仕方法が続いている。この時代から、様々な料理が一皿一皿、会食者にすすめられるようになりました。1757年4月21日、ルイ15世がショワジー城に滞在した際に催した夜食会に着想を得たこの鑑賞システムは、パリ・ルーヴル美術館に再設置される予定です。

## 磁器の物語—東から西へ—



中国では、6世紀よりすでに磁器が焼かれていましたが、ヨーロッパでは、極東との貿易が発達し磁器がヨーロッパの宮廷で普及した、16世紀初頭まで待たなければなりませんでした。かの有名な中国の染付け磁器「青花」への熱狂が一気に高まり、東洋磁器を収集する「磁器室」が現れるようになったほどです。中国との貿易が途絶えると、次いで日本が磁器を供給しました。ヨーロッパの人々は、この神秘的な素材に魅せられ、早くからこれを模倣しようとします。ドイツでは、18世紀初頭に磁器の製造に成功します。フランスは、「軟質」と呼ばれる、釉が柔らかい軟質磁器を17世紀に発明します。それまで磁器の材料、カオリンが不足していたのですが、1769年に、リモージュ付近でカオリンの鉱脈が発見され、新しい形状や新しい技術が発達しました。

「ルーヴル - DNP ミュージアムラボ」は、ルーヴル美術館と大日本印刷（DNP）のコラボレーションから生まれた共同プロジェクトです。多様な技術を用いた美術鑑賞の新しいアプローチ方法を探求しています。ルーヴル美術館は学術的情報の編集を行い、DNPと協力して、作品と観客をつなぐ媒介“メディアシオン”的説をたて、実現方法のコンセプトを練ります。DNPはその技術力とノウハウを駆使し、ルーヴルと連携しながら、鑑賞システムを開発・製作しています。

編集・発行 ルーヴル - DNP ミュージアムラボ  
学術担当 マリー＝ローラン・ド・ロシュブリュンヌ

©2010 Louvre - DNP Museum Lab  
本小冊子の無断複写、複製、転載を禁じます。